

この教材が生まれた背景

この教材は、佛教大学の教職科目の「教育の方法と技術」を担当するにあたって、多人数の授業(初年度は 218 名、 最多で 276 名)を大講義室で実施するために開発されたものを遠隔学習用に改編したものです。これまでの授業経験をもとにチーム学習で実現してみようと始めたのですが、受講している学生の学力格差が大きいのに戸惑いました。さらに多人数であるので学習管理のためにケータイを活用することを試んでいます。下宿生のなかには自分のコンピュータを持っていないものもいますが、ケータイなら全員が持っていますから。

1999 年に開発を始めて以来 7 年が経過して、こうして遠隔学習に適用できるまでに開発が進みました。まだ解決しなければならない問題は残っているのですが、一段落したことは事実です。日本の学会で発表してもまだピンとこないところがあるようですが、それは大学での多人数授業を実践的に研究している事例がまだ少ないからでしょう。そこで欧米の学会で数回発表しましたが、特にヨーロッパで発表するといろいろな反響があります。それには理由があります。

わが国の学校教育にコンピュータが導入されるきっかけとなったのが、1983 年に実施された OECD による国際比較調査ですが、翌 1984 年にパリ本部で会議があり私も出席しました。その後、毎年のようにヨーロッパに視察や調査に出かけ、1990 年代に実施されたイギリスの全国共通カリキュラムの導入過程も見聞する機会がありました。イギリスや北欧諸国で研究に取り組まれているのは、自律学習 (Autonomous learning) であつたり協調学習 (Collaborative learning) であつたりします。ヨーロッパ諸国では小学校から大学まで授業料が無償というところが多く、教育は福祉政策としてきわめて重視されています。ところが最近では大学まで進学する人が多くなり、それに対処するためにも自律して学習する能力の育成が求められ、そのための教育技術学 (Pedagogy) の重要性が指摘されています。情報通信技術 ICT を教育に活用することの必然性があるのです。

わが国でも教育にコンピュータやインターネットが導入されていますが、e-Learning がまだコンピュータ技術の視点から開発研究されている傾向があります。わが国では導入の理由が不明確なままに、これまでの教師主導の教育をますます強固なものにする傾向すらみられます。わが国もユビキタス ICT 社会を迎えようとしています。雇用環境が激しく変動する社会になるでしょう。それに対処するためには協調しながらも自律して自己の能力に挑戦でき、しかも安価な学習環境を実現することが大切でしょう。この教材がそうした協調自律学習の発展に寄与すれば幸いです。

2006 年 3 月 編集代表 西之園晴夫